

# 支部便り

平成22年11月みつわ会東北支部

## 街路樹の紅葉拾いて梨かな 圭舟



ジャズフェス杜の都の象徴 川口直樹

**暑**熱の夏が去って、仙台市の「定禅寺ストリートジャズフェスティバル」が行われた。今年で20回目。バンド数770、会場50、観客70万人というから驚いてしまう。会場設営だけでも大変なのに電気設備や音のミキシング、ボリュームの調整の難しさを見ると気が遠くなる。

わたしがジャズに魅入られた50年前はデキシードジャズが全盛だった。ロカビリーも一世を風靡していた。

もはや古びてしまったジャズもこのフェスティバルではしっかり聞くことができる。

古いプレーヤーもまだ肺活量は充分なようで、昔のアメリカの一流バンドにも負けない技術と音を出していた。20年前に生まれた娘さんも懸命にチューバを吹いていた。

このフェスティバルの最大の功績は定禅寺通りを会場に選んだことである。杜の都を代表するケヤキの大木の杜の道、古く懐かしい音も都会のメランコリーな音もビッグバンドの大音量もすべて抱擁してくれる。

この大イベントの副産物としての経済効果も考えると、ぜひ全国的なブランド化が必要ではないだろうか。

(平成22年9月25日河北新報に掲載)



### 11月の行事

11月	支部	みちのく損保
10日(水)	幹事会 4時~みつわコーナー	
13日(土)		麻雀
18日(木)	昼食会 12時「しゃぶ禅」※	
19日(金)		盛岡を偲ぶ会
24日(水)		奈良の旅
25日(木)		奈良の旅
26日(金)		奈良の旅

※みちのく行事「奈良の旅」と重なるので第3木曜日に繰り上げました。

出席の意思表示は11月12日(金)までに伊藤さんか友彦さんに。

## 「美女と部屋で」 加藤徹三

西の方角、蔵王に連なる山の端に日が沈むと、茜色の雲が、それを浮かべていた空の淡いコバルト色と一緒に、見ているうちにどんどんその色を失い、ほんのひと時の黄昏を迎えて秋の一日が終わります。

今年は、やっと10月になってから狭いベランダの鉢で月下美人が咲き、早速部屋に持ち込みました。いい香りで一杯になった部屋で、下戸ながらも子供じみた晩酌を楽しみました。この月下美人は20年前に横須賀で分けてもらった葉（実は葉が変化した茎節という茎なのですが）で、“追浜”（横須賀市）でも“いわき”でも、仙台に越して来た年まで毎年咲いていました。最初の年に咲かなかったので寒いから駄目なんだなあと思っていたのが、翌年からは7月から10月にかけて毎年咲く様になりました。

午後7時過ぎになると先が少し口を開けはじめ、少しずつ、少しずつやっと目に見える位の速度で開いていき、9時には満開になります。真夜中の12時位まで咲き、夜明けにはすっかり萎んでしまいます。

余計な蘊蓄を披露しますと、「美人」の名付け親は明治時代の台湾駐在大使・田（でん）氏（田英夫議員の祖父）で、昭和天皇にこの花の名前を尋ねられた田氏が、とっさに「月下の美人」と答え、その後この名前が定着したといわれるのだそうです。

サボテン科の多年草で、原産地はメキシコ〜ブラジル、花言葉は「はかない美」「はかない恋」「繊細」「快樂」「ただ一度だけ会いたくて」「強い意志」と、それぞれの人がそれぞれの想いを勝手に重ね合わせた結果みたいです。

我が家では、今年が最後だろうと言いながら、ろくに手入れもしないでベランダに放っておくのですが、健気で愛しいものです。「強い意志」とはこ

こからきたのでしょうか。これだけ花ことばが多いと、花ことばとはいい加減なもので、どうでもよくなるのですが、花を人様にプレゼントする羽目になると厄介で、「この人はこの花の花ことばを知っているのだろうか」とか、俗っぽくなると「この花の値段を知っているのだろうか」とか、雑念に花が汚されることになります。花はただ「美しい」の一言で事足ります。

（蛇足）

夜にしか撮れない写真なので、以前友彦さんから撮り方を聞いたところ、薄いテッシュペーパーをカメラに被せてフラッシュを炊けば綺麗に撮れる（成程!）ということでしたが、面倒なので隣室の明かりを頼りにフラッシュを炊かずに撮ったら意外に様になっていると自分では思っています。芸術写真でもないし、棚のクロスなどがゴチャゴチャ一緒に写っていて、さやかな生活感が滲み出ていていいと、自画自賛しています。

